

# 智積院新文庫蔵『醍醐祖師聞書』の記事について

——付・翻字本文——

宇都宮 啓 吾

## 一 はじめに

智積院新文庫蔵『醍醐祖師聞書』については、意教上人頼賢の伝記としての視点から、また、此書の成立の背景や東山から根来寺へと至るネットワークの問題について、以下の論考を公とした。

○智積院蔵『醍醐祖師聞書』について―意教上人頼賢とその周辺を巡って―（『智山学報』六四 二〇一五・三）

○智積院聖教における「東山」関係資料について―智積院蔵『醍醐祖師聞書』を手掛かりとして―（『智山学報』六五 二〇一六・三）

幸いにして、拙稿を踏まえた検討も行なわれるに至って

おり（後述）、此書の全文を公開することによって更なる検討に俟ちたい。

そこで、本稿では、本書、智積院新文庫蔵『醍醐祖師聞書』の全体に関する概要の紹介と翻字本文を提示することとしたい。

## 二 本書の書誌的事項と章立て

本書は、外題の如く、また、いくつかの記事の終わりに「○○給ケルト承也」との表現を含むように、「醍醐寺祖師」に関する「聞書」形式に基づいた書である。

本書の書誌情報については、すでに前稿で示した所ではあるが、全体把握として、改めて提示しておく。

本書の書誌的事項は以下の通りである。

「醍醐祖師聞書」(53函8号) 一冊 写本 室町時代  
 中後期 綴葉装 一六丁(共紙表紙のため、現装表紙  
 を含めている) 楮紙打紙 二四・四糎×一六・四糎  
 原表紙(料紙共紙／素紙) 見返し(料紙共紙) 漢字  
 仮名交じり文 一面八行／一行一八字程度 界線なし  
 朱陽刻長方(単廓) 印「智積院」 墨点(室町後期／  
 仮名点(訓・音)・声点(圈・胡麻)・合点・注記 訓  
 点には他後筆もあり)

(外題)「醍醐祖師聞書」(直書)

(表紙右上)「五十二」

(表紙右下)「智積院／玄宥」

そして、冒頭の目次部分に「已上此卷ニアル也／下二見  
 タリ」との記述から、本書『醍醐祖師聞書』は、本来、上  
 下二巻の書であつたものと考えられる。

以下に、本書の記事を見出しに沿って示す(見出しの上  
 に番号を付した)。

- ① 一 意教上人御弟子等事
- ② 一 勝賢 実継、成賢、実賢等御事
- ③ 一 北院御室成賢共勝賢御弟子<sub>ニテ</sub> 御室遍知院相<sub>ニ</sub>弟  
 子也

- ④ 一 理性院金剛王院<sub>ト</sub>定海<sub>ト</sub>、由来<sub>ト</sub>事
- ⑤ 一 問云金剛王院根本三密房阿闍梨聖賢也<sub>ト</sub>、<sub>出家</sub>其<sub>人</sub>也、<sub>入道</sub>其<sub>人</sub>也

後 源運<sub>大僧都</sub>

杲海<sub>小僧都</sub> 賢海<sub>權僧正</sub>西四座主 実賢<sub>前大僧正</sub>五代ノ末弟  
<sub>蓮花院</sub>西四座主号金剛王院

- ⑥ 一 (勝覚から成賢に至る血脈)

- ⑦ 一 遍智院成賢御弟子意教上人道教僧都<sub>ト</sub> 御事

- ⑧ 一 峯堂勝月上人貴人<sub>キ</sub>也意教上人ヲチ御前也

- ⑨ 一 意教上人越前御下向<sub>ニ</sub>時寺里<sub>ノ</sub>名<sub>事</sub>

- ⑩ 一 (勝賢―成賢から浄真・道教・意教の流の血脈)

- ⑪ 一 成賢<sub>ト</sub>実賢<sub>ト</sub>薄双紙分別事

- ⑫ 一 秘抄ウラ書事

- ⑬ 一 平等房十卷書<sub>ト</sub>云テ十卷作書アリ多物引<sub>ニ</sub>之

- ⑭ 一 高野新別所宝物事

- ⑮ 一 実賢真言御師等事

- ⑯ 一 隆澄 房円事

- ⑰ 一 思融真言御師等事

- ⑱ 一 良含真言御師等事

尚、前述のように現装表紙見返しに本書内容に関する章  
 立ての七行目に「已上此卷ニアル也／下二見タリ」との記  
 述のあるところから、本書が当初は上下二巻(現装では二

冊)であつたものと考えられるが、その章立ての後に「一管坊実継事 地藏院深賢事」との記述が存する。前行の割書のように見える「下二見タリ」がこの「一管坊実継事 地藏院深賢事」に対する注記(書写段階でのズレが起こった可能性)と考えれば、下巻の章立ての一部と見ることも可能であるが、一方で、見返し部分に章立てを示した後にそのまま本文に入つた最初の行と捉える可能性もあり、存疑である。但し、本書には、この「一管坊実継事 地藏院深賢事」と両者共に言及する記事は存しない。更に検討が必要となる。

### 三 本書の記事の“場”

稿者は、前稿において、本書が「本書の「頼賢伝」(頼賢の入宋と法華山寺慶政との関係)は、意教流、特に、東寺地藏院流覚雄方相承の中において伝えられていたものと考えられる。また、本書が、家原寺聖教の一つであることから、家原寺を拠点とした律家側の資料として文章化されたものと考えられる。」<sup>(1)</sup>と、醍醐寺三宝院の一門、東寺地藏院流内の記事で律家とも関わる形で記事が記載されていることを述べた。この点を踏まえて、牧野和夫氏は、「頼

賢・思融などの法系に伝来した口伝であることは確実である」<sup>(2)</sup>こと、「実賢―良胤―良含―静基」の血脈や「実賢―如実―思融―実融」という相承の枠内でのみ生き続けた「事実」であり、醍醐寺の嫡々の院家には「忘却」を必然として不思議のない事柄であつた」と指摘している。本書の「頼賢」伝を軸に据えた記事の豊富さや本書末に記載された「実賢真言御師等事」・「思融真言御師等事」・「良含真言御師等事」は、「頼賢・思融などの法系」であることや「実賢―良胤―良含―静基」・「実賢―如実―思融―実融」という相承の中での記事であることを物語るものと考えられる。この点は、本書の記事に基づく後掲の「図①」の相関図からも明白である。つまり、外題にある「醍醐祖師」とは言いながら、醍醐寺における諸流の嫡流を巡る祖師の聞書ではなく、右の如きある特定の“場”に限定された聞書と言える。

この点については、前稿において既に、従来とは異なる「頼賢伝」の問題<sup>(1)</sup>(見出し⑦⑧)や延慶本『平家物語』における実継勸賞記事との関連<sup>(5)</sup>(見出し②)から指摘したところであり、いずれも、牧野氏が述べる「醍醐寺の嫡々の院家には「忘却」を必然として不思議のない事柄」とも言

える記事に言及した。

更に、実賢の流や頼賢・思融周辺における問題について付言するならば、以下の如き記事にも注目出来る。

### 三・一 空願上人如実・浄尊

見出し⑪十丁裏から十一丁表にかけて、成賢と実賢の薄双紙に混乱の生じていることに関連して、加茂空願上人如実について、次の如き記事が存する。

### (10ウ)

7 (略) 又一ニハ賀茂空願上人実

8 賢御弟子也此人又浄尊御弟子空禪房ケウケン篋釵ニ云人ニ

### (11オ)

1 習給ヘリ此篋釵師浄尊ト云テ故遍智院経蔵開閉

2 皆此浄尊ハカラヒ也此時遍智院次第ヲ残所ナク

所持

3 也故意教上人タニモ我カ所持無次第ヲ浄尊ニ尋テ

4 書タリ此孫弟子空願上人実賢流極給ヘル人也此

5 加茂ヨリ成賢実賢次第ニ一成テ今実賢方ト云人

## 6 授次第皆多分遍智院御作次第ナル歟

右の記述から、空願上人如実が実賢の弟子である一方、「浄尊―篋釵―如実」の流であり、この浄尊が成賢の嫡弟である道教の相承した遍智院聖教の管理を行っていたことが知られる。また、ここでは、如実が実賢の流を極めた人物であることも記され、彼が「成賢―道教」の遍智院の流と実賢の流の両方を受けていることが知られる。この点も、醍醐寺院家の嫡々の相承とは別の記事と言える。また、意教上人頼賢もこの浄尊から遍智院の次第を受けたことが知られる。更に、見出し⑦六丁表によれば、成賢存命中の遍智院経蔵の管理を行っていたのが頼賢（此人無クテハ聖教開閉カナハシ）であったことにも注目出来る。右の記事からは、院家における嫡弟の聖教相承とは別に、実際の聖教の管理者の存在や、相承の背景を窺うことができる。

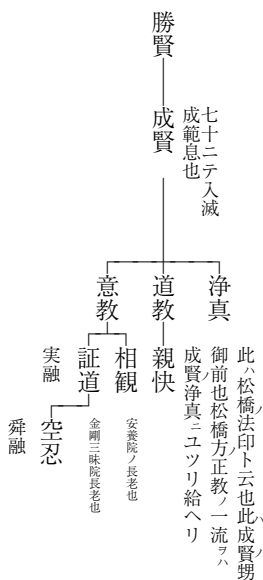
浄尊については、道教から嫡弟の親快へと相承されるに際して、親快が若年にして具支灌頂入壇も許されなかったため、この浄尊が後に「第三重の印可」を納めた函を親快に伝えるよう道教から委ねられている。この「第三重の印可」は地藏院流にあつて秘中の秘とされるものであり、こ

それが親快と篋劔に伝えられることになる。<sup>(6)</sup>尚、見出し<sup>(13)</sup>十二丁表「平等房十卷書云テ十卷作書アリ多物引之」も、右のことに関わる記事と考えられる。浄尊は、親快が道教滅後に憲深から法流を受けたことを不服（見出し<sup>(7)</sup>八丁裏では、深賢が伝法灌頂を行なうこととなっていた旨が記される）として山科平等房に住していた実賢門下の篋劔の元に身を寄せ、彼を付法の嫡弟とし、この地で浄尊の流の聖教類を書写させている。そして、この篋劔による「第三重の印可」の流が如実であり、これは清水八坂吉祥蘭院の一円上人賢爾、佐々目頼助にも伝えられている。

### 三・二 頼賢

頼賢伝については、前稿で紹介したところであるが、他にも注目出来る記事が存する。

見出し<sup>(8)</sup>九丁表において、松橋方の相承の旨の血脈が示され、頼賢が浄真より受けていること、また、浄真について、「此ハ松橋ノ浄真ト云テ成賢ノ甥御前也」と記す。また、もう一つの血脈、見出し<sup>(10)</sup>本書九丁裏では「甥御前」だけでなく、次の如く、浄真から頼賢に「松橋方ノ正教ノ一流」の伝えられたことが記される。



頼賢が法華山寺において、松橋本の『覚禅鈔』等を書写していることも、右のことからその背景が窺われる。

更に、「頼賢伝」としては本書の見出し<sup>(9)</sup>九丁表にも注目したい。

- 2 一意教上人越前御下向時寺里名事
- 3 所<sup>ヲ</sup>金南東ト云也 寺<sup>ヲ</sup>歎喜寿院云也
- 4 檀那<sup>ヲ</sup>頭一房云也 金南東ノ地頭也

頼賢の越前下向については、甲田宥畔氏が『意教上人御臨終記』における越前での臨終の記事から次の如く指摘している。

この書の初めに「越前国永徳寺」とあり、先述公然記<sup>(40)</sup>の裏書に「此以下ハ上人越州御下向之剋、上醍醐令參籠之時奉問記之了」の注記があつて、夕間記に

も「化度のために北国辺に下向し給いけるか」と言っているから、上人は越前に下向し、永徳寺に逗留中入滅せられたのではなからうか。証談鈔「仏生房相承事」の条には「仰せに云わく、故上人は十二月七日入滅、然るに十月の頃遠行ありしに」と出ているから、この年十月に出立したものらしい。証談鈔には入滅場所について明記していないが、ここでは後に詳しく触れるように、仏生房（仏性房義能）が上人遠行以前に受法が完了していないことを述べているから、意教上人は帰山しなかったと受け取るべきであろう。

このことから、本書の記事も、頼賢臨終時の越前下向にかかる寺とその里の名を示したものと考えられる。この点では、本書七丁表においても、越前下向が弟子の請によるもので「下向七月也十二月七日イクホトモナクテ御入滅也」としている。本書からも頼賢の越前での入滅が確認できる。尚、『続伝灯広録』の「無量寿院義能伝」によれば、義準（大日房能忍門下から道元門下を経て頼賢門下となった人物。後に義能と改名。高野山金剛三昧院にて頼賢と交流、門下となる。）は実際に頼賢を越前に請して衆生接化を願ひ、義準自らも施財を奉じて頼賢から教えを受けたこ

とが知られている<sup>8)</sup>。このことからすれば、頼賢の越前下向は義準（義能）の求めに応じたものと考えられる。本書にある頼賢の越前下向時の寺名が「歓喜寿院」であることも、「無量寿院義能伝」によれば、義準が晩年に退転した寺院が「歓喜院」とされており、そこに繋がりが窺われ、頼賢の越前下向が義準の招聘により、その所縁の寺院に寄居した可能性が考えられる。そして、この義準が実融と共に頼賢の死を看取った可能性も考えられる。また、従来、義準の退転した歓喜院の位置は明らかでないが、一つの可能性として、本書の記事の「金南東」、また、檀那として、当地の地頭「顕一房」にも注目してみたい。

### 三・三 思融

頼賢の弟子として、見出し⑦十四丁表「思融真言御師等事」、そして、醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脉』に記載される思融（後に泉涌寺智鏡・道玄に律・密教を学び、四天王寺勝鬘院円珠と改名）が頼賢について法華山寺に随従していた可能性を、牧野氏は次の如く述べている<sup>9)</sup>。

もし、円珠である思融が光寶に師事した、とするならば、光寶没年とされる延応元年（1239）以前に醍

醐寺に修学の日々を送っていたことになる。既稿に「成賢―頼賢」の師資の流れで頼賢にも師事しており、頼賢が醍醐寺を離れ慶政の法華山寺へ赴いた際に付き随っていた可能性もあることを記したが（これらの点の解明は今後の課題の重要なひとつである）、『円照上人行状』からは全く窺うことのできない履歴である。（略）近世に至る僧伝類に認められない頼賢及び頼賢門下の慈猛など（思融・義準などの可能性）の履歴の一齣「法華山寺における修学（了行の一件がからむか、どうかについての問題は、今後の課題として残る）」は、戒壇院側の資料においても「空白」であり、逆に改めて重要な事実」として考慮されなければならぬ。

この点についても、見出し⑦十四丁表では思融の真言師として光宝の名が挙げられている。

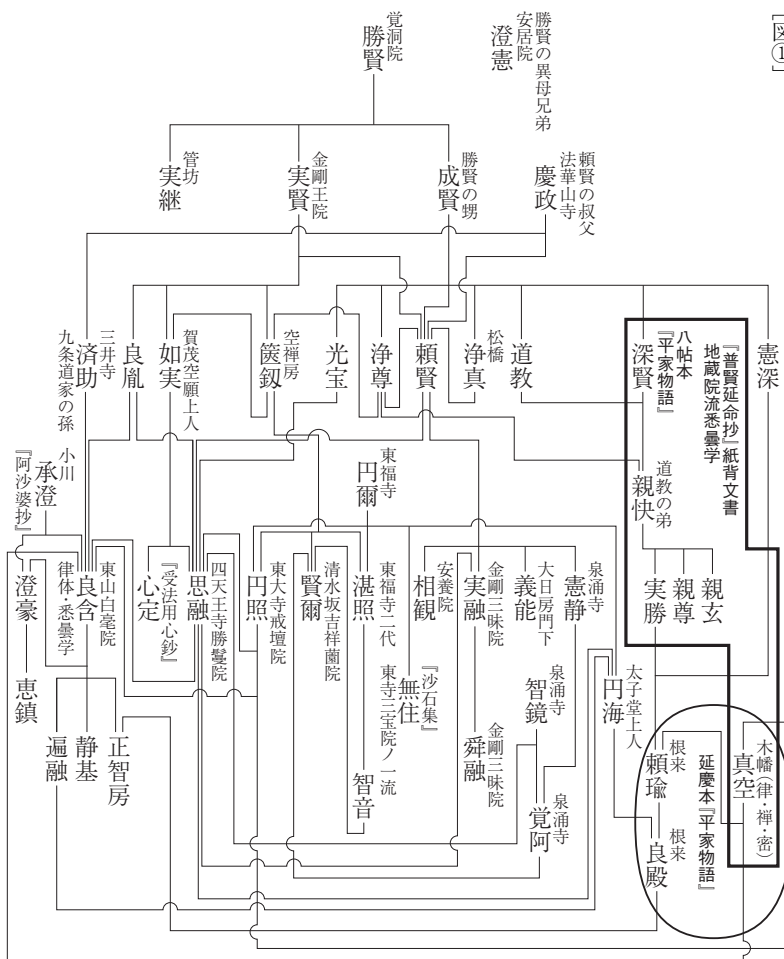
如実	実賢御弟子也賀茂空願上人ト云 又空禪房廣銀ト云人モ弟子也	空禪房ノ淨尊ノ弟子也
法助	准三宮関白殿ト中也	
光賢	成賢ノ御弟子也	思融又円珠ト云也 相意房也
頼賢	意教上人也 成賢御弟子也	

牧野氏が可能性として指摘する「思融の師である光宝」、  
「思融の法華山寺随従」に関する根拠の一つとして、本書  
の記事が利用出来るものと思われる。  
尚、見出し⑦七丁裏―八丁表には、四天王寺勝鬘院長老  
相意上人として、思融が頼賢の思い出を語る場面も存す  
る。

### 三・四 本書の記事の“場”

今まで述べた如く、嫡流相承内における言説とは異なる  
ものが本書には記され、それらが頼賢や実賢から思融・実  
融・舜融、また良含の流を軸に濃密に展開されている点に  
本書の特徴が存し、今後は、更に各記事の内容を精査し、  
他文献との比較や関連付けが必要になるものと思われる。

【図①】



紙面の都合もあり、各記事の全てを詳細に検討することは叶わないが、本書に記載される主要な人物を核として、また、それらを繋ぐ人物がいる場合には、それらも補って伝授・教学上の相関図を試みに描くならば、上の【図①】のようになる。

太枠で囲った部分については、地蔵院の経蔵に存した悉曇書の書写に関わった人物であり、牧野氏が指摘した醍醐寺に存した八帖本『平家物語』に関わる藤井永観堂文庫蔵『普賢延命鈔』紙背文書にその名の見えるグループと重なる。そして、この地蔵院流における悉曇学は丸く囲った延慶本『平家物語』とも深く関わる根来寺・頼瑠の



流にも伝わり、頼瑠の弟子の良殿の元に、悉曇学の明匠であつた東山白毫寺良含の弟子の正智房が入っている<sup>13</sup>。また、良含は真空を師とすると共に、東大寺戒壇院円照との繋がりも窺える。そして、四天王寺勝鬘院思融は、頼瑠が仁和寺経瑜から相承して頼淳―増喜と相承した勧修寺流勝鬘院方の印信の中で「仁和寺法助―思融―円海―良殿」と繋がる。

更に、前述した義準（義能）と根来寺頼瑠周辺の問題として、牧野氏は次の如く指摘している<sup>15</sup>。

九条家を後ろ盾にした「慶政―頼賢」の師資相承の血脈が、更に「義能」に展開し、真空や頼瑠の周辺などを介して延慶本『平家物語』第一末「康頼疏黄嶋二熊野ヲ祝奉事」の「真言教浄土教兼修（康頼）」と「達磨宗的信仰（俊寛）」との教義勝劣問答に影響したのではないかと考える（後堀河・四条朝の時代相、更に後嵯峨朝への転変を含む微妙な問題をかかえる）。

一二四、五〇年代から一二七〇年代にかけての「慶政―頼賢―義能」の血脈とその周辺に展開した「もろもろ」の営為事象が、延慶本『平家物語』に影を落としていたのである。

本書の内容、相関図が根来寺頼瑠周辺の延慶本『平家物語』の「場」とも重なることになる。この点は、本書の伝来自体が根来寺やそれに繋がる和泉国家原寺において伝わっていたものであることも関わるものと考えられる。

また、稿者は、前稿において、本書を手掛かりとして聖教類を分析することで東山から根来寺までが繋がることを指摘したが<sup>16</sup>、この相関図においても、前述の根来寺頼瑠の流と東山白毫寺良含の流がつながり、東山における泉涌寺・憲静・覚阿・智鏡、清水坂吉祥蘭院賢爾、東福寺円爾・湛照、また、金剛三昧院の実融・舜融、四天王寺勝鬘院思融、東大寺戒壇院円照、そして、醍醐寺の成賢門流や金剛王院実賢門流、更には血縁関係に基づく安居院流澄憲や法華山寺慶政ら非常に幅広いネットワークを看守することができる。そして、それらが中世における宗教的世界としての一つの「場」を形成しているものと考えられる。本書は、そういった「場」において伝えられた聞書として捉えられるものと思われる。また、この繋がりには聖教の形成にも影響を与えるものと思われる。特に、智積院新文庫の家原寺聖教は、この繋がりに基づく形成の様子が窺える。

本書の緩やかな「網」の中には、無住が『沙石集』の中

で立川流批判の書として取り上げた『受法用心集』の作者心定<sup>(17)</sup>の如き人物も加わっていくものと思わる。そして、無住自体も東福寺開山の円爾に学び、また、金剛王院流実賢の流との関わりや猿投神社蔵『三昧耶戒作法』に記載される思融への意識<sup>(18)</sup>、更には、「東寺末流金剛仏子道暁」・「東寺三宝院ノ一流」といった名のりは本書自体の意教流・東寺三宝院・地藏院流覚雄方との繋がりが窺われ、この中に配置することが可能であろう。但し、相関図として如何に繋ぐかは今後の課題である。そして、頼賢門下の慈猛や篋釵門下の佐々目頼助の如く、東国とも繋がりが、また、金山院や悉曇学等では、天台宗小川流承澄や澄豪・恵鎮と繋がりが、このネットワークは更に広がりを持つものと思われ、今後の諸資料の渉猟と精査の必要性を痛感する。

#### 四 おわりに

以上、本稿では智積院新文庫蔵『醍醐祖師問書』に記載される記事について、前稿を踏まえながら、そのいくつかを紹介すると共に、本記事成立・伝承の「場」についても検討してみた。

とは言え、本書のみならず、書承ネットワークの問題に

ついては、諸資料を軸としながら、諸分野の知見を多角的に捉え直し、統合する必要がある。また、本書自体についても更に検討すべき課題は多いものと思われる。後掲の翻字本文と共に諸賢のご批正を仰ぐ次第である。

#### 注

- (1) 拙稿「智積院蔵『醍醐祖師問書』について―意教上人頼賢とその周辺を巡って―」『智山学報』六四 二〇一五・三

本書の伝来が家原寺周辺であるため、「家原寺を拠点とした律家側の資料」と指摘したが、厳密には、意教流・東寺三宝院の一流である地藏院流が含まれた場で伝わり、家原寺を拠点に書写されたものと考えられる。

- (2) 牧野和夫「延慶書写時の延慶本『平家物語』へ至る一過程―実賢・実融―一つの相承血脈をめぐって」『根来寺と延慶本』『平家物語 紀州地域の寺院空間と書物・言説』二〇一七・六

- (3) 牧野和夫「宋版一切経の舶載に係る一、二の問題―実賢・頼賢―実融」という相承に沿って―『実践国文学』九 一二〇一七・三

- (4) 注(1) 文献

- (5) 拙稿「智積院聖教における「東山」関係資料について―智積院蔵『醍醐祖師問書』を手懸かりとして―」『智山学

報』六五 二〇一六・三)

(6) この点については、以下の論文に詳しい。

田中悠文「中納言律師御園ノ淨尊伝攷(二)」(『高野山大学密教文化研究所紀要』一九二〇〇六・二)

(7) 甲田宥畔「意教上人伝攷(上)」(『高野山大学密教文化研究所紀要』一二一九九九・二)

(8) 以下で指摘する。

佐藤秀孝「永徳院義準と無量寿院義能—永平寺道元門下からの離脱をめぐる—」(『印度學佛教學研究』四九巻一号 二〇〇〇・一二)

(9) 牧野和夫「思融—良含」周辺のこと・杭州出自の宋人のこと・「軍記物語と東アジアの仏教世界」補遺」(『實踐國文學』八〇二〇一一・一〇)

(10) 本文の記事を基本とし、その他の資料も用いた。その際、印信・血脈の類や牧野和夫『日本中世の説話・書物のネットワーク』(和泉書院 二〇〇九)の成果、「慶政—清助—良含」は柴佳世乃『説経道の研究』(風間書房 二〇〇四)を参考とした。

(11) 以下で考察を行なった。

拙稿「京都国立博物館松本文三郎文庫所蔵の悉曇資料について」(京都国立博物館『学叢』四二二二〇二〇・六)

(12) 牧野和夫「深賢所持八帖本と延慶本『平家物語』をめぐる共通環境の一端について」(水原一編『延慶本平家物語考証(二)』新典社 一九九二)

(13) 注(11) 文献

(14) 野沢諸法流印信類聚刊行会『野沢諸法流印信類聚』(一九三六)八〇・三六「勸修寺勝鬘院」

筑波常遍『勸流伝授前談』(勸修寺教務部 一九九四)で指摘する。

(15) 牧野和夫「十三世紀中後期をめぐる一つの「文学的」な場について—意教上人頼賢「入宋」の可能性より延慶本『平家物語』と達磨宗の邂逅をめぐる一、二の問題に至る—」(『中世文学』四六 二〇〇六)

(16) 注(5) 文献

(17) 心定については、以下の論考でも言及される。

牧野和夫「談義所通藏聖教について—延慶本『平家物語』の四周・補遺—」(『實踐國文學』八三 二〇一三・三)

(18) 小林直樹「無住と金剛王院僧正実賢の法脈」(『説話文学研究』四四 二〇〇九・七)

牧野和夫「『沙石集』論—円照入寂後の戒壇院系の学僧たち—」(『實踐國文學』八一 二〇一二・三)

(19) 伊藤聡「無住撰述三昧耶戒作法解題」・「翻刻」(豊田史料叢書編纂会編纂『豊田史料叢書 猿投神社聖教典籍目録』豊田市教育委員会 二〇〇五)

(20) 無住の『雑談集』では寂尊門下の実道房源海に止観を聞き、下野薬師寺で空阿房光厳(頼賢の弟子慈猛(本書冒頭記事)の改名前の名)が『摩訶止観』を講じたという。

（永村真「下野薬師寺の再興」〔栃木県史〕二〇 一九八  
一）本書ではこの慈猛が東寺大勧進であることを述べて  
おり、また、東寺観智院本『聖財集』奥書の「東寺末流金  
剛仏子道暁」という記述や『雑談集』では「東寺三宝院ノ  
一流」を受けたことが知られる。

#### 【付記】

本稿は、令和二年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤  
研究（B）「新義真言系聖教の形成と教学的交流に関する基礎  
的研究」（課題番号：17H02342・代表者：宇都宮啓吾）の成果  
である。

文献調査につきましては、真言宗智山派宗務庁・智積院御当  
局より多大なるご高配、ご厚恩を賜りましたこと、心より深謝  
申し上げます。

## 【翻字本文】

### 【凡例】

一、翻字本文は、智積院新文庫蔵『醍醐祖師聞書』に基づく。

一、原本の配行・字詰を保ち、訓点・諸符号をも出来るだけ忠実に翻字するよう努めた。しかし、製版の制約上十分でない場合がある。今後の影印の公刊に期したい。

一、原本の丁付については、共紙表紙（未装訂）であることから、表紙から第一丁として数え、各丁の表裏の始めに「（一オ）」（第二丁表・「（一ウ）」（第二丁裏）の如く示し、各行数は各行の行頭に算用数字で示した。

一、漢字の字体は、現行の新字体を用いた。但し、抄物書「西酉（醍醐）」・「井（菩薩）」・「花ム（花蔽）」・「竹人（範俊）」等はそのままとした。その場合、（ ）に包んで当該字を示した。

一、平仮名・片仮名の字体は、現行の字体に改めた。但し、合字の「シテ」・「コト」は、本文の形「ノ」・「リ」のままとした。

一、虫損・汚損等によって判読困難な文字については、当該箇所□として示した。また、判読困難ではあるが、内容から推測できる文字については、その文字を□に囲って示した（但し、その

推測があまり明確で無い場合は傍らに「（？）」を付した場合がある）。

一、見せ消ち符号が付されている場合、当該字の左傍に「＝」を付した。

一、補入符号が付されている場合は、当該箇所に「○」を付し、その右傍に補入字を付した。

一、本文中の明らかな誤写（宛字を除く）と覚しき幾つかについては、そのまま翻字した上で、右傍に「（ママ）」を付した。

一、翻字に際し、注が必要と思われる点は、当該箇所の傍らに（ ）に包んで記した。

〔本文〕

(一才) 現装表紙

1 五十三

智積院

玄宥

3 醍醐祖師問書

(二ウ) 現装表紙見返し

(白紙)

(二才)

1 勝賢<sup>少納言</sup> 実繼<sup>ケイ</sup> 成賢<sup>ト</sup> 実賢<sup>ト</sup> 御事

2 北院御室<sup>ト</sup> 遍智院<sup>ト</sup> 御相弟子事

3 理性院<sup>ト</sup> 金剛王院<sup>ト</sup> 御事

4 金剛王院<sup>聖殿</sup> 実賢御事也

5 三宝院道教上人意教上人<sup>ト</sup> 御由来事

6 成賢御作<sup>シテ</sup> 薄双<sup>ニ</sup> 実賢流具<sup>シテ</sup> 有分別事

7 秘抄ウラカキノ分別<sup>已上此卷ニアル也</sup>

8 一管坊<sup>シチケイ</sup> 実継事 地藏院深賢事<sup>シムケム</sup>

(二ウ)

1 一意教上人御弟子等事

2 下野国<sup>ノ</sup> 薬師院<sup>ササキ</sup> 慈明上人<sup>ト</sup> 施入寺長老願行

3 上人東寺大勧進也此二人<sup>ハ</sup> 大旨上人嫡弟<sup>ト</sup> 思食

4 タル人々也已上此卷内在之至下可見之

5 一勝賢 実繼 成賢 実賢等御事

6 岳東院勝賢御弟子<sup>ニ</sup> 成賢<sup>ニ</sup> 実繼<sup>ニ</sup> 実賢<sup>ニ</sup>

7 御弟子アリ成賢<sup>ハ</sup> 少納言<sup>ミチノリマコ</sup> 通憲孫成範御弟子也

8 成範<sup>ト</sup> 澄憲<sup>ハ</sup> 御兄弟也勝賢初<sup>ニ</sup> 実繼<sup>ニ</sup> 付弟<sup>ニ</sup> セムト

(3才)

1 ヤクソク也然トモ澄憲<sup>ノ</sup> 教訴<sup>ニテ</sup> 随後成賢<sup>ヲ</sup> 付弟<sup>ニ</sup>

2 立タリ此時実繼<sup>ハ</sup> 面目<sup>テ</sup> 失<sup>テ</sup> 西<sup>西ノリマコ</sup> カヤノ房<sup>ニ</sup> 引籠<sup>テ</sup> 終<sup>ニ</sup>

3 ハテ給ヘリサレトモ一流正教<sup>ハ</sup> 勝賢<sup>ヨリ</sup> 付属<sup>ニ</sup> アリケリト

承也

4 成賢<sup>ハ</sup> 勝賢<sup>ノ</sup> 付属<sup>ニテ</sup> 大富貴人也上下<sup>西堂塔悉<sup>ク</sup></sup>

5 修理<sup>シ</sup> 給ヘリ将来数珠タニモツ、ラ一以<sup>ツ</sup> 实賢<sup>ハ</sup> 成

6 賢御存生<sup>ハ</sup> 間サノミニ秀サリシカ成賢御入滅<sup>ニ</sup> 後殊<sup>ニ</sup>

7 秀給ヘリ大上人弟子<sup>ニ</sup> 殊秀タリ但シ实賢御灌<sup>ハ</sup>

8 頂<sup>ヲ</sup> 勝賢<sup>ニ</sup> シ給テ其日勝賢御入滅<sup>ニ</sup> アリ故初後

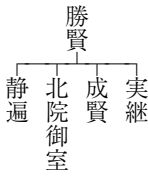
(3ウ)

- 1 夜三昧耶戒<sup>ハ</sup>実繼<sup>ニ</sup>遇<sup>テ</sup>實賢<sup>ハ</sup>受給<sup>ヘリ</sup>ト承也
- 2 實繼<sup>ハ</sup>勝賢<sup>ハ</sup>上足<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>初後授也サテ後實賢<sup>ハ</sup>
- 3 靜遍<sup>ニ</sup>真言<sup>ヲ</sup>習<sup>ヒ</sup>給<sup>ヘル</sup>間實賢<sup>ハ</sup>勝賢<sup>ハ</sup>為<sup>ニ</sup>孫弟子<sup>トモ</sup>
- 4 云<sup>ヘリ</sup>但<sup>シ</sup>成賢<sup>ハ</sup>御孝養<sup>ニ</sup>三十五日<sup>ニ</sup>實賢<sup>ハ</sup>唱導<sup>ス</sup>
- 5 請<sup>シ</sup>給<sup>ヘル</sup>其時上下<sup>ノ</sup>西<sup>ノ</sup>西<sup>ノ</sup>高僧達<sup>中ニテ</sup>我勝賢<sup>ハ</sup>
- 6 孫弟子ナル事仰<sup>アリ</sup>ケルト承也靜遍<sup>ハ</sup>勝賢<sup>ハ</sup>御弟子<sup>ニテ</sup>
- 7 成賢<sup>ハ</sup>實賢<sup>ハ</sup>等ニハ同相<sup>シ</sup>弟子也又堅賢<sup>ニ</sup>モ實賢<sup>ハ</sup>
- 8 習<sup>ヒ</sup>給<sup>ヘル</sup>堅賢<sup>ハ</sup>成賢<sup>ハ</sup>弟ニテ勝賢<sup>ハ</sup>弟子也

(4オ)

- 1 勝賢<sup>号覺洞院通憲ノ御子也</sup>成賢<sup>成範ノ御子也勝賢ノ甥御前也</sup>勝賢<sup>ト</sup>成範<sup>ト</sup>兄弟也
- 2 一北院御室成賢<sup>ハ</sup>共勝賢<sup>ハ</sup>御弟子<sup>ニテ</sup>御室遍知院相<sup>ヒ</sup>
- 3 弟子也雖然遍智院<sup>ハ</sup>尚勝賢<sup>ハ</sup>嫡弟也故御室御不<sup>ニ</sup>処
- 4 ヲハ常遍智院<sup>ハ</sup>御尋<sup>アリ</sup>ケリ

5



6

一理性院金剛王院定海<sup>ト</sup>由来<sup>ノ</sup>事

(4ウ)

- 1 勝覺僧正御弟子<sup>ニ</sup>定海<sup>ト</sup>理性院<sup>ト</sup>金剛王院<sup>ト</sup>三人<sup>アリ</sup>
- 2 理性院<sup>ハ</sup>理性房<sup>ハ</sup>法眼賢覺<sup>云也</sup>金剛王院<sup>ヲ</sup>三密房<sup>ハ</sup>
- 3 阿闍梨聖賢<sup>ト</sup>云也<sup>出家人也</sup>賢覺<sup>ハ</sup>聖賢<sup>ハ</sup>共勝賢<sup>ハ</sup>
- 4 御メノト子也故御イトヲシミニテ真言<sup>ヲ</sup>教<sup>ヘ</sup>給<sup>ヘル</sup>雖
- 5 然勝覺<sup>ハ</sup>御嫡弟<sup>ハ</sup>定海也故理性院<sup>ト</sup>金剛王院<sup>ハ</sup>勝覺<sup>ハ</sup>
- 4 末弟子傍流也
- 5 一問云金剛王院根本三密房阿闍梨聖賢也<sup>出家入道ノ人也</sup>
- 6 其後源運<sup>大僧都</sup>杲海<sup>小僧都</sup>賢海<sup>權僧正西廂主蓮花院</sup>

(5オ)

- 1 實賢<sup>前大僧正五代末弟西廂座主号金剛王院</sup>答云實賢<sup>ハ</sup>岳洞院勝賢<sup>ハ</sup>
- 2 御弟子ナカラ而<sup>モ</sup>金剛王院嫡<sup>ヲ</sup>ツキ金剛王院<sup>ハ</sup>管領<sup>シ</sup>
- 3 給<sup>ヘル</sup>間人皆金剛王院僧正<sup>ト</sup>云<sup>ヘリ</sup>故金剛王院<sup>ハ</sup>流受<sup>タル</sup>
- 4 間金剛王院<sup>ト</sup>云也雖然實賢<sup>ハ</sup>一期三寶院方真言<sup>ヲ</sup>
- 5 人<sup>ニテ</sup>伝<sup>テ</sup>金剛王院<sup>ハ</sup>方真言<sup>ヲ</sup>一人<sup>ニモ</sup>不被授之也我三
- 6 宝院真言師也トコソ名ノリ給<sup>ヘル</sup>ケルト承也

7 一勝覚 定海

聖賢 金剛王院三密房阿サリ  
勝覚御メノト子也  
源運 杲海 賢海 実賢  
大僧正一長者西座主  
元海 二長者  
大納言源雅俊息也  
実運 勝俱胝院僧都  
西座主  
西座主

賢覚 理性院理性房法眼  
聖賢ト兄弟也

勝賢 西座主權僧正  
小納言通憲息也

成賢 中納言成範子息也  
遍智院之權僧正  
西座主

(5ウ)

1 一遍智院成賢御弟子意教上人道教僧都御事

2 遍智院勝賢嫡弟也中納言成範御息也有力上下

3 西西堂塔等悉此權僧正修理給へり但下西西

4 塔未修理時不來我滅後々修理スヘシトテ料足

5 百貫文充置也雖然御年滿七十御入滅其御

6 弟子意教上人道教僧都二人上足意教俗姓

7 ヒノ具足也道教俗姓コカノ具足意教俗姓猶

8 上方人也意教道教共同年也嫡々道教僧都付属也

(6オ)

1 雖然道教三十七御入滅意教七十余御存生歟意教

2 上人児御弟子愛弟異名長者御前ト云也

3 其故法師成東寺長者成ヘシトテ長者御前ト申也

4 遍智院御存生時器量人ナリトテ奈良ヘツカワシテ三

論

5 学セサセ給ケリ雖然此人無クテハ聖教開閉カナハシ

ト

6 テイクホトモナクシテ又西酉召登セ給ケリ大事愛

7 弟也遍智院御入滅時此意教上人付仰云我四

8 思遂不成死スヘシ一切経渡下西酉置タシ

(6ウ)

1 二通世シタクアリシ公上随間不叶死スヘシ

2 三法花経千部自身ヨミタカリシ不叶

3 四青龍寺拝見セムト思事不叶頼賢申云御

4 入滅ノ後一々可成ト申故御入滅後一々四御願シトケ

5 申サル其後聽通世セリ聽入唐シテ五千卷一切経

6 渡シテ下西酉経蔵立テ納也此時意教上人青

7 龍寺拝見歟不見也御入滅後三年内千部経ヨミテ

8 結願アリ四事悉皆御入滅後叶給ヘリ通世間

(7オ)

1 峯堂ヲチ御前三井寺真言師勝月上人下居住



2 サテ峯堂ヲチヨリ付属セムト仰アリケル時峯堂  
 3 出給ヘリ其後律僧成高野山一心院居其後安養院  
 4 長老請入レマイラセテ真言師シ給ヘリ此時金剛三昧  
 5 院長老証道上人意教御弟子成安養院カヨヒテ真  
 6 言習給ヘリ其御弟子今空忍上人是也故空忍マテハ遍  
 7 智院ヨリハ四代也其後意教上人越前弟子アリ請下マ  
 8 ヒラセタリケルカ下向七月也十二月七日イタホトモ  
 ナクテ

(7ウ)

1 御入滅也証道上人モ下御入滅アヒ給ヘリ意教上人御  
 ナノリ  
 2 頼賢申也意教通世後御名歟西酉(醍醐)卿阿闍梨  
 3 トモ申ケリ又道教僧都器量人此秘抄拳(抄)タル  
 4 仏并次第セテ一々取テヤスク行ヘキヤウニ次第約  
 本  
 5 造リタル人也雖然早世間不教歟意教上人ハ一期□ニ  
 6 不咲ケル人也ト天王寺相意長老仰アリケリ相意上人  
 7 仰云我意教上人承事時夜ネフリスコシタリシ時意  
 教

8 上人先ヲキテ火トホシテ供養法御始アリ後□□口

(8オ)

1 キテ道場入ラムトスレトモ皆カケマワシタリ花棚下  
 □□  
 2 アリケル計カケノコシ給ヘリ其ヨリク、リテ道場  
 入タリシ  
 3 時ウシロヨリ見タテマツレハ御耳ハタラクヲ見テ御  
 咲アリ  
 4 ケナリト思シヨリ外一期御ワラヒ給ヘルヲ不見ト  
 云ヘリ此ハ  
 5 道者至所歟意教上人安養院御住時長老名相観  
 6 長老ト申也意教請シテ御弟子成人也  
 7 意教上人道教僧都同年遍智院卅二マテ共ヲクレ  
 8 マイラセラレタリ其後中五六年アリテ道教僧都卅  
 七ニテ

(8ウ)

1 入滅也其御弟親快許呵許リサツケテ御相弟子西酉(醍醐)  
 2 地藏院深賢伝法灌頂事道教僧都アツラエヲキ給

3 故<sup>ニ</sup>灌<sup>ハ</sup>頂<sup>ハ</sup>親<sup>ハ</sup>快<sup>ハ</sup>深<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup>カヒテシ給<sup>ヘリ</sup>親<sup>ハ</sup>快<sup>ハ</sup>道<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>也

4 一<sup>ハ</sup>峯<sup>ハ</sup>堂<sup>ハ</sup>勝<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>貴<sup>ハ</sup>キ人<sup>ハ</sup>也意<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>ヲチ御<sup>ハ</sup>前<sup>ハ</sup>也

5 遍<sup>ニ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup> 成<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup> 淨<sup>ニ</sup>真<sup>ニ</sup> 此<sup>ハ</sup>松<sup>ハ</sup>橋<sup>ハ</sup>淨<sup>ハ</sup>真<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>甥<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>前<sup>ハ</sup>也

意<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>也 此<sup>ハ</sup>松<sup>ハ</sup>橋<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>也

成<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup> 淨<sup>ニ</sup>真<sup>ニ</sup> 賴<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup> 真<sup>ニ</sup>徹<sup>ニ</sup>

6 故<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup>御<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup>松<sup>ハ</sup>橋<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>淨<sup>ハ</sup>真<sup>ハ</sup>ユツリ給<sup>ヘリ</sup>其<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>

7 淨<sup>ハ</sup>真<sup>ハ</sup>ユツリ給<sup>ヘリ</sup>

(9オ)

1 成<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup> 道<sup>ニ</sup>教<sup>ニ</sup> 親<sup>ニ</sup>快<sup>ニ</sup> 此<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>宝<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>也

賴<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup> 道<sup>ニ</sup>教<sup>ニ</sup>弟<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>親<sup>ハ</sup>快<sup>ハ</sup>也

2 一<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>越<sup>ハ</sup>前<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>向<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>寺<sup>ハ</sup>里<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>

3 所<sup>ハ</sup>金<sup>ハ</sup>南<sup>ハ</sup>東<sup>ハ</sup>ト云<sup>ハ</sup>也 寺<sup>ハ</sup>歎<sup>ハ</sup>喜<sup>ハ</sup>寿<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>也

4 檀<sup>ハ</sup>那<sup>ハ</sup>頭<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>房<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>也 金<sup>ハ</sup>南<sup>ハ</sup>東<sup>ハ</sup>地<sup>ハ</sup>頭<sup>ハ</sup>也

(9ウ)

1 勝<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup> 成<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup> 七<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>滅<sup>ニ</sup> 成<sup>ハ</sup>範<sup>ハ</sup>息<sup>ハ</sup>也

淨<sup>ニ</sup>真<sup>ニ</sup> 此<sup>ハ</sup>松<sup>ハ</sup>橋<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>印<sup>ハ</sup>ト云<sup>ハ</sup>也此<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>甥<sup>ハ</sup> 御<sup>ハ</sup>前<sup>ハ</sup>也松<sup>ハ</sup>橋<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>正<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup> 成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>淨<sup>ハ</sup>真<sup>ハ</sup>ニユツリ給<sup>ヘリ</sup>

道<sup>ニ</sup>教<sup>ニ</sup> 親<sup>ニ</sup>快<sup>ニ</sup>

意<sup>ニ</sup>教<sup>ニ</sup> 相<sup>ニ</sup>觀<sup>ニ</sup> 安<sup>ハ</sup>養<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>ノ長<sup>ハ</sup>老<sup>ハ</sup>也

証<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup> 金<sup>ハ</sup>剛<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>昧<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>長<sup>ハ</sup>老<sup>ハ</sup>也

實<sup>ニ</sup>融<sup>ニ</sup> 空<sup>ニ</sup>忍<sup>ニ</sup> 舜<sup>ハ</sup>融<sup>ハ</sup>

(10オ)

1 成<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup>薄<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>紙<sup>ニ</sup>分<sup>ニ</sup>別<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>

2 問<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>及<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>ハ遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>初<sup>ハ</sup>テ造<sup>ハ</sup>給<sup>ヘリ</sup>勝<sup>ハ</sup>憲<sup>ハ</sup>

3 御<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>及<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>トテ無<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>ルヲ實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>及<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>皆<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>

4 御<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>及<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>分<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>及<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>目<sup>ハ</sup>録<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>目<sup>ハ</sup>録<sup>ハ</sup>

5 以<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>ナラハ實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>

6 實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>傳<sup>ハ</sup>受<sup>ハ</sup>給<sup>ヘリ</sup>歟<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>何<sup>ハ</sup>

7 仰<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>傳<sup>ハ</sup>受<sup>ハ</sup>給<sup>ヘリ</sup>事<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>雖<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>

8 御<sup>ハ</sup>造<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>及<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>アルハ推<sup>ハ</sup>衆<sup>ハ</sup>義<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>根<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>

(10ウ)

1 成<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup>薄<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>紙<sup>ニ</sup>混<sup>ハ</sup>乱<sup>ハ</sup>セサレトモ末<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>

2 中<sup>ハ</sup>律<sup>ハ</sup>僧<sup>ハ</sup>真<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>師<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>実<sup>ハ</sup>兩<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup>習<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>

3 薄<sup>ツ</sup>及<sup>ニ</sup>紙<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>賢<sup>ハ</sup>方<sup>ニ</sup>取<sup>リ</sup>具<sup>テ</sup>師<sup>ハ</sup>資<sup>ハ</sup>相<sup>ハ</sup>承<sup>リ</sup>乱<sup>リ</sup>タル也  
 4 是<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>タトヒ實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>ナリトモ成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>ヨリ嫡<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup>也  
 5 實<sup>モ</sup>賢<sup>ハ</sup>勝<sup>ニ</sup>賢<sup>ハ</sup>孫<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>ナノリ給<sup>ヒ</sup>タル間<sup>ハ</sup>我<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>第<sup>ニ</sup>  
 6 取<sup>リ</sup>具<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>授<sup>ケ</sup>給<sup>ヒ</sup>タル事<sup>ハ</sup>モアルヘシ本<sup>ヨリ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>成<sup>ニ</sup>賢<sup>ハ</sup>  
 7 辺<sup>ハ</sup>執<sup>シ</sup>タル御<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>無<sup>ニ</sup>之<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>賀<sup>ハ</sup>茂<sup>ハ</sup>空<sup>ハ</sup>願<sup>ハ</sup>上人<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>  
 8 賢<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>又<sup>ニ</sup>淨<sup>ハ</sup>尊<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>空<sup>ハ</sup>禪<sup>ハ</sup>房<sup>ハ</sup>篋<sup>ハ</sup>釵<sup>ハ</sup>ト云<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>

(11ウ)

1 習<sup>ハ</sup>給<sup>ヘ</sup>リ此<sup>ハ</sup>篋<sup>ハ</sup>釵<sup>ハ</sup>師<sup>ハ</sup>淨<sup>ハ</sup>尊<sup>ハ</sup>ト云<sup>ニ</sup>テ故<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>藏<sup>ハ</sup>開<sup>ハ</sup>閉<sup>ハ</sup>  
 2 皆<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>淨<sup>ハ</sup>尊<sup>ハ</sup>ハカ<sup>ラ</sup>ヒ也<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>第<sup>ハ</sup>殘<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>ナク所<sup>ハ</sup>持<sup>ハ</sup>  
 3 也<sup>ニ</sup>故<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>タニモ我<sup>ハ</sup>カ所<sup>ハ</sup>持<sup>ハ</sup>無<sup>ニ</sup>次<sup>ハ</sup>第<sup>ハ</sup>淨<sup>ハ</sup>尊<sup>ハ</sup>尋<sup>ニ</sup>  
 4 書<sup>ハ</sup>タリ此<sup>ハ</sup>孫<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>空<sup>ハ</sup>願<sup>ハ</sup>上人<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup>極<sup>ハ</sup>給<sup>ヘ</sup>ル人<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>  
 5 加<sup>ハ</sup>茂<sup>ヨリ</sup>成<sup>ニ</sup>賢<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>第<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>成<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>云<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>  
 6 授<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>第<sup>ハ</sup>皆<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>分<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>第<sup>ハ</sup>ナル歟<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>成<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>  
 7 御<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>及<sup>ニ</sup>紙<sup>ハ</sup>北<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>室<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>秘<sup>ハ</sup>抄<sup>ハ</sup>ヲ尊<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>大<sup>ハ</sup>旨<sup>ハ</sup>同<sup>シ</sup>  
 8 物<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>殊<sup>ハ</sup>秘<sup>ハ</sup>抄<sup>ハ</sup>ヲ用<sup>ニ</sup>故<sup>ハ</sup>秘<sup>ハ</sup>抄<sup>ハ</sup>ヲカ<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>我<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>第<sup>ハ</sup>

(11オ)

1 具<sup>シ</sup>タル歟<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup>義<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>雖<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>成<sup>ニ</sup>賢<sup>ハ</sup>伝<sup>ハ</sup>受<sup>ハ</sup>  
 2 ナムトシタル事<sup>ハ</sup>ハ更<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>可<sup>ハ</sup>有<sup>ニ</sup>之<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>共<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>朋<sup>ハ</sup>友<sup>ハ</sup>ナルナリ

3 一<sup>ニ</sup>秘<sup>ハ</sup>抄<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>  
 4 ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>根<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>北<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>室<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>レアリ  
 5 今<sup>ハ</sup>蓮<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>根<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>云<sup>ニ</sup>テ  
 6 遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>無<sup>ニ</sup>之<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>  
 7 實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>根<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>ナ<sup>ラ</sup>多<sup>ハ</sup>クシタル本<sup>ハ</sup>アリ  
 8 此<sup>ハ</sup>根<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>又<sup>ナ</sup>實<sup>ハ</sup>賢<sup>ハ</sup>少<sup>ハ</sup>々<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>具<sup>ハ</sup>給<sup>ニ</sup>タル歟<sup>ト</sup>

(12オ)

1 蓮<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>仰<sup>ハ</sup>アリケル  
 2 金<sup>ハ</sup>宝<sup>ハ</sup>抄<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>ヲウ<sup>ラ</sup>ニ書<sup>ハ</sup>ノセタルハ何<sup>ハ</sup>ナル人<sup>ハ</sup>シタルヤラ  
 3 難<sup>キ</sup>知<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>故<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>ウ<sup>ラ</sup>書<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>キ本<sup>ハ</sup>遍<sup>ハ</sup>智<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>  
 4 方<sup>ニ</sup>キ<sup>ハ</sup>ラウ也<sup>ニ</sup>  
 5 一<sup>ニ</sup>平<sup>ハ</sup>等<sup>ハ</sup>房<sup>ハ</sup>十<sup>ハ</sup>卷<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>ト云<sup>ニ</sup>テ十<sup>ハ</sup>卷<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>アリ多<sup>ク</sup>物<sup>ニ</sup>引<sup>ニ</sup>之<sup>ハ</sup>  
 6 已<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>畢<sup>ハ</sup>

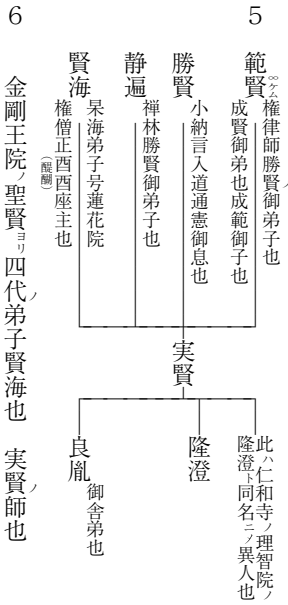
(12ウ)

1 一<sup>ニ</sup>高<sup>ハ</sup>野<sup>ハ</sup>新<sup>ハ</sup>別<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>宝<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>  
 2 大<sup>ハ</sup>師<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>筆<sup>ハ</sup>梵<sup>ハ</sup>字<sup>ハ</sup>両<sup>ハ</sup>阿<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>光<sup>ハ</sup>縁<sup>ハ</sup>起<sup>ト</sup>  
 3 花<sup>ハ</sup>ム經<sup>ハ</sup>十<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>卷<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>卷<sup>ハ</sup>画<sup>ハ</sup>像<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>動<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>卷<sup>ト</sup>

- 4 已上高野大師御筆也
- 5 一幡(播磨)書写上人御鈴 梵本タラ葉經
- 6 梵本十六羅漢画像 又画像大不動此ハ失タリト云也
- 7 一四天王立方角事
- 8 東方 提頭テウ賴吒ライ者持国天事也

(13才)

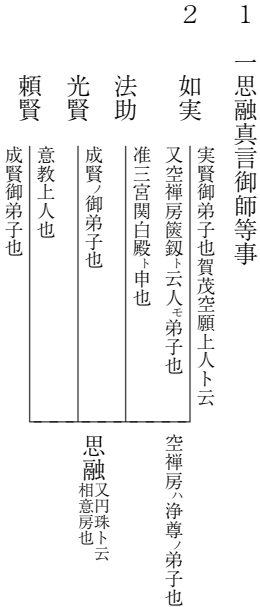
- 1 南方 昆楼ヒルシヤク刃ヤク者 增長天也
- 2 西方 昆楼博刃者 広目天也
- 3 北方 毘沙聞者 多聞天也
- 4 一実賢真言御師等事



(13ウ)

- 1 一隆澄 房円事
- 2 秘抄中如法愛染卷秘抄内无之隆澄云也
- 3 房円如法愛染法有之云也此理智院隆澄真乘院房円也共仁和寺方真言師也故成賢僧正秘藏私書入シ給ヘリ隆澄申サル也故竹人如法愛染次第依カキ入給歟一義アリ小野大次第竹人御作也其中如法愛染法又如法尊勝法実賢御弟子隆澄此同名ニ異也
- 8 同名ニ異也

(14才)



3 或人云思融云 師ニ値「百余入信ヲ取」但一人云

(14ウ)

1 一 良含真言御師等事

実賢法助両僧正弟子。和方人也

2

隆澄

理智院三位僧正良遍ノ弟子也又範俊ヨリ八代ノ弟子也  
又ハ大夫法印ト云寛助ヨリ六代ノ弟子也

良胤

実賢弟子同舍弟也

長遍

静瑜弟子也範俊ヨリ八代長遍也  
賢長弟子也

盛遍

隆澄弟子也仁和方人也  
寛助ヨリ七代ノ盛遍也

真空

寛舜弟子也三宝院ノ勝寛ヨリ八代ノ弟子也

(15才・ウ)

(白紙)

(16才・ウ)

現装裏表紙

(白紙)

(本学日本語日本文学科教授)